

野鳥たより

—北海道—

第 1 号

編集者 北海道野鳥愛護会設立準備会

発行者 北海道国土緑化推進委員会

発行日 昭和45年2月10日

野鳥は人類の文化財

野鳥愛護会準備会長 犬飼哲夫

ひところ野鳥類は、山紫水明といわれた日本では、その数においても、種類においても、ひじょうに豊富であったのです。ところが国土の開発が進むにつれ、どんどん自然がそこなわれ、野鳥のすみ家もせばめられ急激にその数を減じてしまいました。

野鳥を愛する風習は古い伝統があり、各種の民話や、情緒的な文学の中に民情と深いつながりをもつて随所にあられています。それは野鳥類が自然物として、人間よりはるかに古い起源をもち、しかも人類の友としてその繁栄を支えてきたからです。

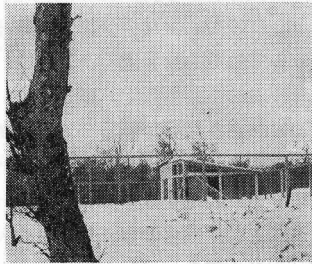
野鳥類は、自然界の平衡を保ち、人間生活にうるおいを与えておりますが、とくに最近では、農業によるいろいろな公害が発生し、世界的な問題となっており、そこで山野における有害動物駆除の役目が大きく買われてきました。

野鳥類に限らず、自然物は大いなる人類全体の文化財であり、過去から未来に引きつぐべき義務を負わされています。このため先進国といわれる国々では野鳥保護は広範な国民運動となっており、国政の重要な一翼として進められているのです。この会が本道の野鳥愛護運動の推進力として多くの会員の参加を望んでやみません。

(北大名誉教授)

尾岱沼に白鳥保護センター

根室地方の尾岱沼(オダイトウ)には、毎冬1万羽に近いオオハクチョウが飛来し越冬しますが、このうち傷ついたり、疾病のため保護を要するものも少なくありません。これを保護して元気にシベリヤへ旅立たせるため、別海村の尾岱沼に、道費補助による「白鳥保護センター」が建立



道民の鳥「タンチョウ」

タンチョウの繁殖地はウスリー川・アムール川流域のシベリヤ東部、中国東北部に広がっておりシベリヤ・中国のものは、中国南部、朝鮮半島に渡り越冬し、日本にもごく少数鹿児島県出水市のマナヅル、ナベヅルの越冬地に飛来することがあります。いつほう釧路湿原に繁殖する北海道のタンチョウは、冬になると、繁殖地周辺の農耕地にえさを求めて移動しますが、渡りはせず、シベリヤのタンチョウとの交流は認められていません。

北海道のタンチョウは、一時、絶滅の危機におちいりましたが、多くの人々の献身的な努力で救われ、昭和39年9月1日「道民の鳥」に指定されています。

されることになり、12月の道議会で予算が計上されました。

施設は625平方メートルの金網のゲージで、ゲージ内には病舎や、直径16メートルの円周の池などが設けられます。

雀

菅野 寿衛吉

○ スズメ と 私 ○

わたしは草深い田舎で育ったせいとか、草木をはじめ、小鳥や虫や魚など自然のものならなんでも好きである。外国産のものなど、それなりに面白いが、なんといっても子供の時からなじんできた在来のもののほうが親しみが深い。雀も、そうした昔なじみの仲間である。藁くずをくわえて土蔵のカワラの下へくぐっていく姿、秋の稲田で鳴子におどろいてザーツと飛び立つむら雀、みななつかしく思い出される。

稲作地帯では、作物を荒すというので雀は追い立てられているが、憎まれてはいないようだ。舌切雀の話なども、害鳥というイメージではない。雀が害虫をたべてくれることは明らかである。ある時、蛾をたべるのを見たことがある。成人の小指ほどもある大きな白蛾を、羽根だけ残してきれいにたべてしまった。

わたしはたびたび転任したが、移り住む先々に雀に餌をまいてきた。屋敷には、いつもたくさんの雀が集まっていた。そのためか、庭木に虫がつかなかった。もっとも、これには、ヒタキやカラ類のおかげもあろう。

○ スズメ と 犬 と 猫 ○

雀とカラスは昔から仲良しだといわれているが、犬と雀の間柄も悪くはない。犬の種類によるのかも知れないが、わたしの家では、犬小屋のまわりに、いつも雀が群がっている。犬のお血は雀の足あとだらけである。雀があまり騒ぐと流石に犬もうるさいとみえて一声ワンと叱りつけることはあるが、ふだんは雀のなすがままに任せている。

ところが猫は、そうはいかない。わたしの庭には、何匹かの猫が代るがわるやってくる。時には、小鳥の餌台の下で寝ていることもあるし、木に登って巣箱に近づくこともある。野良猫らしいのだが、いずれ飼猫の子孫なのであろう。品骨いやしからぬ風彩で、人間など無視して、ゆうゆうと見張っている。たいていの場合は、雀のほうが早く気がついて逃げるのだが、猫は眼だけで追っている。それでもたまには雀の被害が出る。そんな時、わたしは、猫を追い払うべきかどうか、いつも迷うのである。というのは、猫が小鳥を狙うのは、野外ではごく自然のことだからである。わたしは、自然には、なるべ

く干渉したくないのである。自然といえば、わたしは庭木の剪定もあまりしたくない。野鳥にとっては、伸び放題のほうが好ましいはずである。クモの巣も払わない。トンボや蝶がクモの巣にかかるのは可愛想であるが、これも自然である。それにクモがふえてくるとツグミが現われてパクツとたべてくれるので、わが家がクモの巣城になることはない。

○ 我が家のスズメ ○

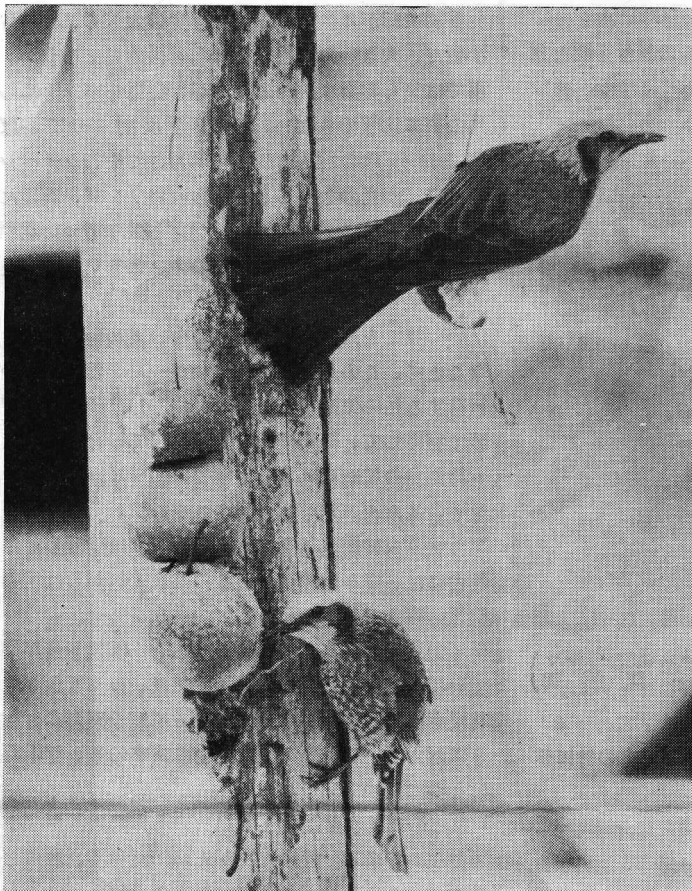
家つきの雀というのが、いるのではないかと思う。お食事の時間が終わって仲間の群が去った後にも、必ず二〜三羽は残っている。別に目印があるわけではないが、餌をやるときに口笛を吹くと、屋根の上からチュクンと応答する奴がいる。ああ、あれは、うちの雀だなど思うのである。

雀が煙突の中へ入ってくることもある。たいてい夜の明け方である。煙突の傘の下で眠っている間にねぼけて中へ落ちるのか、それとも、朝の寒さに目をさまして、暖かそうな室内の気配にあこがれて、ついふらふらと入ってしまうのかも知れないが、火を焚いていない季節なので焼鳥にはならない、煙突の中でカサカサやっているので、救い出してやる。東京の郊外では、オナガが煙突に入るときいているが、うちのサンタは雀だけである。雀をつかんでみて、意外に小さく、意外にあたたかいのおどろく。生あたたかい小さなものが手の中でピコピコする感触は、まことにはかなく、こちらのほうがどきどきする。近年、石炭ストーブが少なくなったせいとか、冬でも雀は黒くならなくなった。茶羽織の縞目がよく見えるようになってきた。

○ 雪あび と スズメ ○

雀の砂あびや水あびはめずらしくないが、雪あびをするのは、北海道の雀だけかもしれない。新雪に首をつつこんでパタパタやつたあと、日当りのよい小枝に戻って羽づくろいをする。水あびと同じしぐさである。

小鳥は雑食だときいているが、雀が一番喜んでたべるのはご飯である。いかにも日本の雀らしく、パンよりもご飯のほうへ先に集まる。ヒナを育てている頃、何十羽という親雀が飯粒をくわえて四方八方へ飛び散っていくさまは、食糧難時代の人間さまの配給風景さながらである。ところで今年は、どうしたのか、シジュウカラのお膳(豚脂)をしきりに失敬している。今までも少しは脂をたべていたのだが、今年のたべ方はだいたいふはげしいようだ。これでは遠慮深いカラ達へお膳が廻らないのではないかと心配である。雀のくらしも近代化してきたらしく、巣材には新建材のビニールの紐をさいて使うようになったし、お食事のほうにも、洋風化のきざしが見えてきたようだ。(北海道電力会社監査役)



エゾヒヨドリ

源平の時代ひえどり合せということがあった。ヒヨドリの鳴き合せであるが、ときには美女の舞いが賭けられ、ときには、あまりやり方が派手すぎると、院からお詫（たしなめ）を受けたことがあったという。毎年、藻岩山でピツコロ、ピツコロとなくこの鳥の鳴き声に耳を傾けるのが常であるが、冬になつて餌台に飛来する姿はキリリとして美しい。

文・写真 土屋 文男

（日本野鳥の会、鳥類保護連盟、鳥学会会員・札幌市公衆衛生部長）

給餌台の早春

藤の沢小鳥村村長 小沢 広紀

—冬来りなば春遠からじ—

パート・テーブルのお客

きびしい寒気、山鳴りをともなう吹雪、ただ寂寞の感じ。これが小鳥の村の冬景色で、巣箱かけの頃のふくれあがった活気にみちた村の様子とは全く対照的なきびしい姿である。だが、凍りついた雪の下でチューリップが黄色い芽を大切に抱いて頑張っているように、「小鳥の村」では給餌台に集まる冬鳥の姿にほのかな春の前ぶれが現われている。

1月5日午前7時の気温マイナス15度、西北西の風、小雪模様、午前10時頃、日差しはあたたかい。給餌台の御客様は、常連で会議好きなスズメ約30羽。腕白者のミヤマカケス5羽。はにかみ屋のシジュウカラ4羽。黒エボシのコガラ3羽。オスのくせに赤いリボンとエプロンのエゾアカゲラ1羽。こんな取り合せで、それぞれの好みのテーブルで朝食を迎える。

一番行儀の悪いのはおしやべり屋のスズメたちで、給餌バットに踏みこんで粒餌をつつきまわす。大粒なトウモロコシは、テーブルの外にハジキ飛ばされるので雪の上が黄色くなるぐらいだ。なんとも程度の低いテーブルマナーだが、このトウモロコシが、正午前後に食堂に現われる5羽のコウライキジの召上り物なので、無駄になることはない。

シジュウカラやコガラは、しつけがよくゆきとどいて行儀が良い。トウモロコシの実をひとつづつ取りはずして胚芽の所からきれいに食べる。堅くて小鳥のクチバシで処理できない部分は、コウライキジの餌になるために雪の上に散らされる。

ミヤマカケスの食欲は旺盛だ。わき目もふらずにトウモロコシをむさぼり食い、キツツキやシジュウカラのテーブルに移って、豚の脂身を喰いまくり、サツと、根城に

している向いの雑木林に引きあげて、満足したように羽毛の手入れを始める。

赤いエプロンのエゾアカゲラは、ビルの鉄骨を組む鷲



(トウモロコシをついばむミヤマカケス …撮影… 萩千賀)

職にも似た身軽さで、尾羽根を支えにして、木の幹に垂直にとまって丹念に脂肉をついばむ。

賓客はコウライキジ

やがて正午近くホワイトカラーのコウライキジが姿をあらわす。なんともいえない優雅な姿である。一分の隙もない近代紳士。しかも5羽が一隊となつた入場行進に先客の連中は一齋にテーブルを離れて敬意を示す。正直いって毎日見なれている私でさえ、この時だけは一瞬息

をのむ。

5羽全部がオスで、1羽だけ少し大きく、他の4羽は小柄だ、大きいのが親で他は前年の若鳥だろうか。動物園では良くお目にかかる姿だが、白雪をバックにした野鳥の姿に比較できない。冬の日を反射させて羽ばたく姿。1枚1枚の羽毛に映える陽光、つや、クチバシのするどさ、眼光のきびしさ、首の白いリング、翼のたたみ方、なだらかに走る腰の線、ピンと張り切った尾羽根近くで見るこの鳥の姿は、釧路のタンチョウに優るとも劣らない美しさをたたえている。

いつ見ても見飽きすることのない美しい姿だが、残念なことに、この鳥とのつきあいが一月半程しかないので、欲待する私の気持ちが通ぜず、一寸した動きや物音に敏感に反応して、給餌場から姿を消してしまう。

給餌台の最盛期は2月中旬で、エゾヒヨドリ、ツグミシメ、イカル、シロハラゴジユウカラ、それにエゾオオアカゲラも仲間入りをする。冬来りなば春近し。冬の給餌台には、春が同居しているのだ。これからは雪の日や吹雪の時ほど彼等の姿は多い。

「道産子の冬鳥」彼等は実に強い。種類や姿が異なつていても、みんな仲が良い。元気だ。カゼも引かない。札幌市内の幼稚園から見学に来る道産子園児に、きびしさに耐えている野鳥を引きあいに話すのも、年中行事のひとつになっている。

市内の向陽学園からも給餌台のえさ集めにマイクロバスでやって来る。園長先生が先頭にたつて、取残しのトウモロコシやリンゴの落下したものを集めてゆく。給餌台に野鳥をひき寄せ、子供達は野鳥との対話を楽しんでいるだろう。

私もこの冬は、珍客コウライキジとの対話を始める糸口をみつけることにしよう。

(農業)

本会の会員を募ります

北海道野鳥愛護会は、野鳥を愛し、自然に親しもうとする人々の会で、どなたでも加入できます。野鳥の好きな方、野鳥を研究したい方、野鳥を通じて友を求めたい方はどしどし加入して下さい。

1. 会員の資格は、年齢、性別を問いませず。
2. 会費は年額1人300円。団体は1000円です。加入希望者は会費を添え、右記の様式による加入申込書を提出して下さい。
3. 加入申込みは、道庁林務部林政課内「北海道野鳥愛護会設立準備会」に連絡して下さい。会員には会報(本号形式のもの)を年4

回、その他、野鳥通信を配布し、会員の親睦と研究活動を進めるほか、探鳥会、野鳥研究会、野鳥懇談会等に参加していただきます。

北海道野鳥愛護会加入申込書

年 月 日

北海道野鳥愛護会々長殿

住所・氏名・職業・年齢

昭和 年度から北海道野鳥愛護会に加入
したいので、会費 金 円を添えて申
込みます。

野外で鳥の姿や声を楽しむことは、欧米ではすぐれた趣味として確立していて、アメリカでは鳥を観察する人は五百万人もいるといわれています。これらの人たちは趣味として鳥を楽しみながら、一方では社会へさまざまな働きかけをして、自然保護の運動を前進させる大きな力となっているようです。

こんど発足することになった北海道野鳥愛護会も、会則(案)をみると、「野鳥愛護実践活動の推進と野鳥保護思想の普及をはかり、道民の生活環境の改善と農林業の振興に資することを目的とする。」とありますから、保護活動をする団体なのであって、ただの同好会ではありません。

しかし、皆さんのなかには、自分はいくまで趣味として鳥を楽しみたいので、それ以上のことを考えたくはない、という方もあると思います。私は、個人的には、今の日本はもうそんなことをいつてられる時代ではないのだと信じていますが、ここでそれを主張しようとは思いません。趣味だけでも結構ですし、愛護会にもいろんな立場を受け入れるだけの広さは、いつまでも持たせておきたいと考えます。

ただ、そのような人たちに知っておいていただきたいのは、自然保護のために私たちにできる活動は、決して趣味の楽しみと無縁ではない、ということです。

例をあげましょう。「探鳥会」という行事があります。野や山で、さまざまな鳥たちを眺めて楽しもう、という集りです。良いリーダーの指導を受けられるので、ひとりではなかなかわからない鳥の種類をおぼえたり、鳴き声をききわけるには、一番良い方法です。その限りでは全くの趣味の行為ですが、探鳥会を通じて、新しく鳥に興味をもつ人が増えれば、探鳥会は、自然愛好者を拡大するという役割を果しているといえるでしょう。

また、探鳥によって得られた鳥の記録が、大きな力をもつことがあります。日本野鳥の会東京支部の若い女性三人が中心となって生まれた「新浜をまもる会」は、新聞にも大きくとりあげられましたが、千葉県の大塚開発計画に、渡り鳥の休息地をのこすために、めざましい活動を続けています。この活動の基礎となったのは、会員がふだんから集めていた資料で、いつ、どんな鳥が、どれだけ新浜に来るかがはつきりと示されたからにほか

なりません。つまり、鳥を保護するためには、その基礎として、鳥の習性や行動についての知識を得ることが必要なのですが、特に北海道では、どんな鳥がどこにいるかという、最も根本的な情報さえほとんどないので、この点で会の活動には大きな期待がかけられます。このような資料は、多くの人によって少しずつ積み重ねてゆく以外に得る方法がないので、広い北海道では、愛護会のような組織がなかだちをしないと、なかなかまとまらないものなのです。

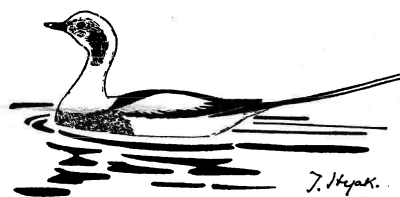
◆ ◆ ◆

北海道は、日本では自然が一番よくのこされているところ。だから鳥の数も多く、しかも、日本では北海道だけでしかみられない鳥がたくさんいます。タンチョウやクマガラのような天然記念物級の種類をはじめ、ふつろにいる鳥のなかでも、ヤマゲラやエゾライチョウなどは、本州以南ではみられないものです。

けれども、あまり自然がゆたかにみえるためでしょう

か。北海道の人たちの、鳥や自然をまもろうとする意欲は、必ずしも高くはないように思われます。といっても私は、タンチョウやハクチョウの保護について北海道があげてきた成果を、決して評価しないわけではありません。ただ、北海道全体としてみると、人の

趣味から保護活動へ



(カットはコオリガモ)

日本野鳥の会会員 百武 充

関心は自然をいかにまもり、いかにうまく利用するかとは少し離れたところにあるようにみえます。

それにまた、北海道の自然は、実際はみかけよりもずっと多く人の手が加えられています。ほんとうの原生林や原野は、もうほとんどなくなってしまいました。広大な釧路湿原でさえ、工場や住宅の建設はタンチョウが巣をつくる場所をおびやかしています。

開発がすすむにつれ、人間と他の動物たちとの共存がむずかしくなるのは、ある程度仕方ないことです。しかし私たちは、北海道が、野鳥にとつても、できるだけ住みよい場所であるようにしたいと願っています。愛護会がそのためにどんな活動をしたらよいか、また、どれだけのことができるかは、会に入る人自身が決めてゆくことです。事務局ではいくつか案を練っているようですが、北海道の雄大な風土にふさわしい、独自性のある会をつくりあげてゆきたいものです。

(大麻在任・道職員)

ヨーロッパの野鳥保護

江別野鳥の会会長 井上元則

★ 減少している野鳥類

戦後長らく待たされていた北海道野鳥愛護会が誕生する運びとなり、関係者の一人として喜びにたえない。

私どもの若かりし50年以前の北海道は、野鳥の一大楽園だった。鳥の種類によっても異なるが、現在はその頃の10分の1から100分の1ぐらいに減少している。

その主な原因は森林原野の開拓、湖沼の干拓、交通網の発達などによって、鳥類の安息所や繁殖所が次第に失われたこと、長年にわたり狩猟者による濫獲、密猟がほしのままに行なわれたこと、また卵や巣の採取、飼鳥のための密猟などがあげられる。それに最近では水田に散布する農薬の影響でツバメなどの減少が目立ってきたという報告もある。

このように文明社会の発展は、人間にとってすばらしい文化をもたらすが、一面開発が進むと自然環境が破壊され、公害の影響を受け、鳥類ばかりでなく人間の存在も危うくなる。また猟銃や猟具、機動力が改良されて、鳥類の大量捕獲が進んでいることも、野生鳥類が減少していく大きな理由となっており、まことに遺憾なことである。

★ 西欧の人なつこい野鳥たち

このように鳥類の減少する条件がすべて整っているのに対し、ここにひとつ見のがせないのは、野鳥愛護思想の欠乏がさらに拍車をかけていることである。その証拠に日本のスズメは人家の軒に営巣しているのに、人間が近づけばすぐ逃げてしまう。欧州のスズメは人間をみれば逃げるところか寄ってきて餌をねだる。

先年スイスに行ったとき、チューリッヒの駅の構内食堂で昼食をしていると、お客がはげしく往来する間をぬって、スズメが平気でパン屑を拾いに来る愛らしい光景に驚ろいた。

スウェーデンのゲーテボルグ市の植物園では、ニゼリウスという植物学者に広い園内を案内してもらったが、一巡したあと、園内喫茶店の野外食卓でコーヒーを飲んでいると、二羽のフィンチ(ヒワ類)が食卓の端に飛んできて餌をねだる。彼は巧みにパン屑を指にはさみ、掌の上に小鳥を呼び、私に写真をとらせてくれた。野生の鳥の人なつこさに驚き、日本人に見せたかったと、今でも当時をしのんでいる。

デンマークのコペンハーゲン郊外にある池では、水鳥の生態を観察したが、この池は周囲が3 Kmぐらい、一方の側にヨシが密生しており、反対側は石垣で、50mも離れ

ると人家が建ちならんでいたが、池にはオオバン、マガモ、ハクチョウなどが幼鳥を混え数百羽、悠然と遊泳していた。そのほかキンクロハジロ、カモメ、カイツブリなどがおり、これらが一団となって、逍遙に来る人が石垣から餌を与えるのにむらがつて、いささかも人をおそれることなく餌の奪い合いをするのである。日本だと人が近づくと、水鳥は池の中ほどに逃避するのが普通で徹底した野鳥保護の実態に驚いたのである。

日本人は小鳥や野生動物を見つけると、大人も子供も追いかけて捕えようとする悪いくせがある。餌づけの方法も考えずに、捕獲して飼って見たがる不心得者も多い。

ところで1月4日この原稿を書いているとき、宮城県下でオオハクチョウ4羽を射殺したハンターが、車のナンバーが手がかりになって捕えられたというテレビニュースがあった。日本の大形鳥類の減少は、長年にわたる不心得なハンターの密猟によることが多い。

野生鳥類の愛護思想は、子供のときから学校教育や社会教育によって、正確な鳥類の知識を養うと同時に、鳥獣保護に関する法令をよく守る風習を育てることによって高揚されるのではなからうか

さらに日本の義務教育における鳥類のカリキュラムがきわめて少ないのは残念である。それには教員養成の大学で、もつと鳥類の知識を修得してもらうことが必要ではなからうか。

これから私どもは、この会を通して、しっかり手をにぎり、野鳥愛護の思想をいつそ高めようではありませんか。

(北海道栄養短期大学教授、農博)



(コペンハーゲン郊外セントフテ池)の水鳥 撮影 井上元則

野鳥雑唱

平井 さち子

雲雀の声いつときたてこみ朝のパン

低き風に駆けだす雲雀冷夏予報

滯空ひばり英詩暗記は歩きながら

一家を挙げて転勤して来た時は、三月半ばとはいえまだ雪がしっかと札幌の地をおゝい、時には吹雪く日さえあった。雪国暮しがどういふものか、皆目わからず、夢中で過すうちに、裏の畑に青いものが覗き始めた頃、頭上はヒバリの声にみち、東京からつれて来た猫の親子も珍らしがって畝の間のヒバリを追いかけたりした。台所の窓から手稲の山なみが望まれ、一日の表情をさまざまに変えながら、次第に冬の眠りから覚めてゆく山の様子を眺め、私達家族には前記猫達も含めて珍らしさと好奇心に満ちた日々であった。

扇状都市の朝のおくゆき雨古鳥

少女期に富士の裾野に過したことのある私は、樹海から流れ出る朝夕のカッコウの声を、その後もずっと耳に生かし続けていたが、30年後にしてようやくまためぐりあう事が出来た。

野のおむすびしやっくり止まらぬ遠郭公

しやっくりが止まらなくなってしまうようなはらかな声や、また、いぢめつ子に泣かされ泣きじやくりながら母親に云いつけに帰るように、頭上を鳴きながら飛んでゆく彼等。彼らは私の心に応じて明るくもわびしくも語りかけてくる。昨年あまりこの声が聞かれなかったように思う。カッコウの初声が畑仕事の目安になっているとか、今年はどうだろう。

筒鳥ほほ、ほほ、都会育ちが敵たてる

手稲の山なみが見えた最初の家から引越して、今は蕨岩原始林に接して住むことになった。

標高約120米、榆、朴、桂、胡桃、せん、楓、辛夷等の大樹に囲まれている。ツツドリ、カッコウ、ヨタカ、クロツグミ、アカハラ、アカシヨウビン等がいつせいに鳴き出す頃は、私とて土地の人に遅れてはならじと庭の隅をほじり、人並に鉾もふるい、えんどうやいげんを蒔き、草取りにも精を出す。囀りの森を背にして時折腰を伸ばし鳥達の姿を求め鳴声を真似てみる。

咀齧いつまで丘の夜鷹が「虚々」と啼く

虚々実々の幸の中。喰い違った儘の人間関係をふと思いつく。この鳥は夕暮れ時から鳴いたり、「怪鴟」などと書くせいかアカハラやクロツグミのような天真爛漫なイメージは湧かない。同じ夜の声でも、アオバズクの方がはるかに親しみを持たせてくれる。

ズボンの砂の畳にやさし青葉木苑

俳句歳時記鳥の部は、中西悟堂の解説によるものが多く、「慈悲心鳥」の項には、「この名は古名であり、俳句、随筆などには好んで今も使われているが、動物学ではジュウイチであり、この名は使わない。北海道、四国、九州でも観察例はあるが、確認されている繁殖地は本州である云々」とある。本州で聞いたことのないこの鳥の声を、私は昨年と一昨年と続けて六月の我家で聞いた。始めて聞いた一昨年は、丁度京都から句友が訪ねて来てくれた晩辞去する友を玄関に送り出した時であった。

慈悲心鳥夜の声を追ふ京言葉

友もその後の礼状の隅に「漏らす灯あたたか妻なり母なり慈悲心鳥」としたためてよこした。

ジュウイチの鳴き声は悲痛に響くが、もっと切ないのはキジの声だろう。あのけたたましい羽博たきと叫びは人間原初のうめきにも似ている。言葉以前の響きをもつて迫る。そう思いつつ支度の買物に出た時、母親に手をひかれた盲目の男の子に出逢った。眼窩はくぼみ、閉ざされた儘の顔は、横断歩道を前にして激しくしばたいていた。その姿はあのキジの声そのものだと思った。

盲ひ兒のけなげな瞬き雉子の声

八月に入ると、朝夕の賑々しさは一変して、ただ静かに原始の木下闇が森を湿らす。やがて時雨が広葉樹林に音たてて通りすぎるようになると、渡りが始まるのである。オンコヤナナカマドの実を食べに、昨年はヒレンジヤクが沢山たち寄ってくれた。

讚美歌や落葉をまねて小鳥降る

木枯しがダイナミックに森をゆさぶりすぎると、明かるい枯木や枯枝が交錯して、森はペン画の様な空となる。寒さの来ないうちに無事流れる様にと、そつと囁きかける甲斐もなく、落葉の上に彼等の屍を見ることがある。疲れ切つてバランスを失つたのか、あるいは兄弟同士の悪ふざけの度がすぎた事故だろうか。

落葉樹林の空のやさしき野鳥の死

森の小鳥達が私の俳句の主役や、ワキ役を演じてくれるようになってから三・四年。まだまだこれから懇ろで、適度に淡々とした隣人同士のようなつき合いが続くだろう。

(俳人「万緑」同人・札幌市界川・主婦)

— 北海道野鳥保護運動のあゆみ —

北海道の野鳥に対する知識の普及と、その愛護を目的として、新しい団体の設立準備会が持たれ、この春発足をみることに決めたのは、まことによろこばしい。

現在、道内には、四つの日本野鳥の会支部と、その外各地の愛鳥学校を中心とする小鳥の村や、特殊な鳥の保護を目的とする保護団体などがあつて、それぞれの立場で、運営方法はちがつていても、長年月に亘つて野鳥に対する知識の普及と、愛鳥思想の涵養につとめてきた。

これらの団体のうち、古いものとしては、釧路タンチョウ保護会や、日本野鳥の会札幌支部のように、昭和初年から存在しているものもあるが、ほとんどは、戦後野鳥に対する一般の関心が深くなると共にできたもので、今後も、年と共にいよいよ各地に多くなつていくことであらう。

このような時代にあつて、往時のことをおもひ浮べると、まことに感慨が深い。そのころは、野鳥はほんの一部の人にしか関心をもたれず、しかも、世間からはもの好きな人間と見られがちであつた。公園あたりで木の上を双眼鏡で見ていると、不思議そうに眺めてゆく人が多かつた。

ことに、うるさい時代には、海岸で海鳥を眺めていてもスパイ扱いを受けかねなかつた。幸い、私は当時警察関係にいたので、そのような時には、制服のおまわりさんに同行して貰うという手をつかつたものである。

野鳥を撮ろうにも、当時は望遠レンズなど無く、レンズを買つて自分で作つたことがあつたが、そんなもので満足な写真がとれるわけもなく、専らスケッチで間に合わせ、おかげで肉眼で鳥の特徴をつかむことはうまくなつたが、なんにしても不便なものであつた。今のように望遠レンズが簡単に手に入り、しかも、カラーで鳥が撮れるなどとは当時は想像もできなかつた。

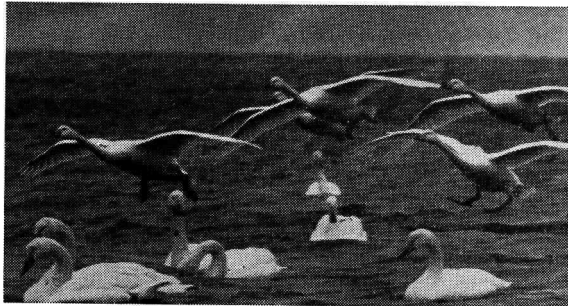
しかし、野鳥に対する一般の目も変つてきて、ことに愛鳥週間が設けられてから、報道機関もよくとりあげるようになってきた。もつとも、この愛鳥週間も一般がよくその趣旨をのみ込んでくれるまでには、かなりの時間がかかり、まず報道関係から理解して貰うことが必要

だつた。週間中に、ウグイスの上手な飼ひ方とか、部屋中鳥かごで埋まつている老人の話などが採上げられるには閉口したのである。

このようにして、野鳥について目の開かれてきた人々にとつて、現在はまことに幸せな時代といえよう。数々の参考書が出され、写真もとりやすく、交通もよくなつて、どこにでも出掛けることができる。これからの野鳥の世界はかぎりなく広がつていくといえよう。

これから野鳥をよく知ろうとするには、その気にさえなればよいので、野鳥はどこにでもいるし、勉強するための条件は一切そろつているのだから、とくに他人にたよる必要はない。吾々が苦労した時代の何分の一かの努力で目的は達せられるのである。

しかし、日常生活の中に、趣味として野鳥に近づこうとする人にとつては、あまり手数が掛つても困る。そのきつかけもなければならぬ。とにかく、楽な気持ちで野鳥に親しんでもらうためには、それを目的とした団体になるべく多くあつた方がよいのである。



もちろん、日本鳥類保護連盟支部のような全国的な規模により活動している団体の支部は、早く実現させなければならぬし、現在ある日本野鳥の会各支部やその他の団体も、それぞれの立場で目的に沿つた仕事をしていくことは、もちろんの

ことであるが、それと共に、新しい団体が、その主要な目的である各地における個人を対象とした探鳥会等の実施と共に、団体や個人の連絡機関としての役目も果たすようになればまことに結構なことといえよう。

北海道のように広い土地では、一般の野鳥愛好家を対象とした場合、ひとつの組織で活動することは難しい。さらに、特殊な鳥類の保護を行なつている団体や、学校関係を中心とした団体はそれぞれ独自の性格を生かしていかなければならぬが、これにふさわしい活動をしてもらうためにも、北海道全般としての考え方や、他の団体の事情をよくのみ込んでおく必要がある。幸い新しいこの団体は年に何回かの会報発行の能力をもつことになりそうなので、よい連絡の場になつてくれるよう期待したい。

鳥の会誕生

日本鳥学会々員 藤巻裕蔵

私の職場には、仕事で山を歩きまわる人が多い、仕事の最中に小鳥が目の前を横切ったり、頭上でさえずったり……。いつもこんな調子なので、鳥に興味をもち熱心に観察している人が何人かいる。でも中にはなんとという鳥か見分けがつかなくて、スズメとは姿や鳴き声がちがうことがわかるくらいで、いくら図鑑を調べても名前もわからないという人もいます。

こういう仲間が集まって鳥をみる会を開くことになった。第1回目は去年の6月のある日曜日に開いた。集まった人たちの服装は、ハイキングスタイルあり、作業服スタイルあり。はきものもズックにゴム長などいろいろだが、首に双眼鏡をかけ、図鑑を持てば装備は完全である。

鳥たちは人間よりずっと早起きである。出発するころにはもうスズメが盛んに飛びまわり、オオジシギが円をえがいて急降下、急上昇をくりかえしている。動きまわる鳥を目で追いかけて、見当をつけて双眼鏡をかまえるがなかなか視野にはいらない。はじめのうちは止まっている鳥でさえなかなか双眼鏡の中に入らないのだから無理もないのだが、それだけに双眼鏡でみつけたときには、「アツみえた。みえた。」と大きわぎである。

「モズだ！黒いマスクをしているのが雄、していないのが

雌だよ。」

「あの雌、口になにかくわえているヨ。アツ虫だ。」

「すぐそばに巣があるぞ。」

「あれツ、あつちのトドマツに止まっているのはモズじゃないぞ。」

「どれどれ、あれはホオアカだよ、頬のところが丸く赤くなっているでしょう。少し離れてもう一羽いるでしょう。ホオアカに似ているけど、頬に白い線がついていて、ホオジロだよ。」

こんな調子で、いつもは5分ぐらいで通りすぎる畑の中を30分近くかかってやっと林にたどりついた。

林に入ると、いろいろの鳥の声が聞えてくる。声はすれども姿は見えず。「あつちがシジュウカラ、こつちがアカハラ、ほらそこにアオジ」といつても、はじめての人はみな同じように聞えるらしい。鳴き声は姿より覚にくく、鳴き声と鳥の名前とがうまく結びつかないのだろう。しかし同じ鳥が何回もあらわれるので、1時間もするとはじめての人でも少しづつわかるようになり、「焼酎いつばいグイーツ」はセンダイハシクイ。「ポポポポ」はツツドリ。「ホーホケキヨ」はウグイス。といったように、特徴のある鳴き声を覚えてしまい、帰り道ではそれぞれの人が、数種の鳥の識別ができようになっていた。

こうして、第1回目の鳥の会をおわつたが、手元のノートを見ると、記録された鳥の数は20種を越えていた。「ヘーツ、ずいぶんたくさんいるものだな」というのがはじめて双眼鏡で鳥を見た人の感想である。

とりあえず鳥の会が発足したが、まだヨチヨチ歩きである。しかし今年は高山の鳥や、水辺の鳥も見に行こうと話し合っている。

(美唄市道立林業試験場勤務)



北海道の鳥

地球上の鳥の種類は約8600種、このうち日本産のものが440種、そして本道には350種が分布しています。

このなかには極めてまれにしか発見の記録のない迷鳥や、不規則にしか渡来しないもの、また本道で繁殖しているが、エゾミユビゲラのように生息地域に限られ個体数が非常に少なく、容易に発見のできないものも含まれていますが、いずれにしても野鳥の豊庫といえます。これにはいろいろな理由がありますが本道の気象条件や、地理的な現象が考えられます。

繁殖期に道南、道央の各地が本州方面と大差のない野鳥の生息環境をつくっているとき、道東・道北方面では極地の海鳥繁殖地と大差のない光景を見ることができます。この気象条件に、海岸から高山までの垂直分布、また原野、湖沼、耕地などの生息環境の変化、季節によつて較差の大きい気象変化が加わり、本道の野鳥の生息環境を複雑にしているからです。

また、津軽海峡を境にしたブラキストン線によつても、本州と本道の間には大きな種類の変化がみられます。これからはこの欄で、全道各地の話題を集め、野鳥の勉強をしてゆくことにしましょう。

北海道野鳥愛護会を結成

野鳥保護の普及指導を推進

本道の野鳥愛護運動を推進するための組織として、北海道野鳥愛護会（仮称）の設立準備会は、昨年11月17日、道庁本庁舎7階会議室に、発起人代表の北大犬飼名誉教授をはじめ、札幌周辺の有志約30数名を集めて開かれましたが、今春5月を目途に結成総会を開くため、下記のような事業運営方針を決め、道内の各野鳥愛護実践団体や、野鳥愛好者によびかけ、会員の確保を急ぐことになりました。

▶ 愛護会結成の目的

現在道内には、日本野鳥の会の地域支部や、各種野鳥愛護実践団体があり、さらに野鳥研究を進めている個人また野鳥愛好者が多く散在しております。しかし、この横の連携と適切な指導組織がないため、運動が中広く発展していない現状にあります。野鳥愛護会は全道野鳥愛好者の連絡組織として、各種の情報の交換や、資料や研究の場を提供し、一面においては、野鳥保護思想を普及するための指導者を養成しようとするものです。

▶ 愛護会の事業ならびに運営

1 野鳥愛護会は、野鳥愛護運動を推進し、道民の運動



野鳥だより原稿募集

どなたでも結構ですから、この会誌にふさわしい原稿をお送り願います。隙筆、論文、提案、希望、各地の話題など、お便り形式でもよろしいです。第1号は名士の方々に寄稿していただきましたが、次号からは一般の皆様さんも参加して下さい。

原稿には住所、氏名、職業、年齢などお書き下さい。次回の発行日は5月の予定です。提出先は
札幌市北3条西6丁目 道庁林政課内
北海道野鳥愛護会設立準備連絡所あて

として広く普及するため、次の事業を行います。

① 野鳥愛護のための各種行事の実施（探鳥会、野鳥研究会、各種講演会等）

② 会員の親睦と研究活動を助長するための機関誌の発行と資料の提供

③ 各種野鳥の調査活動と保護運動

④ 野鳥愛護活動の指導者の養成

2 会は次の方針によって運営されます。

① 会には会長、副会長、理事、監事を置きます

② 総会は毎年1回開き 予算、決算、事業計画を審議決定します。

③ 本会の経費として、個人会員300円、団体加入は1000円を徴収するほか寄付金でまかさないです。

④ 会は毎年4月1日から翌年3月31日までの年度として運営されます。

▶ 設立発起人氏名

設立準備会では、創立総会までの準備会々長として犬飼さんを選出し、愛護会の事務所は道庁林政課に置くことを決めましたが、会の設立発起人としては、次の方々が参加しております。（敬称略）

犬飼哲夫（北大名誉教授）、井上元則（江別野鳥の会）
小沢広紀（藤の沢小鳥の村）、金田寿夫（円山動物園）
斎藤春雄（道文化財委員）、佐々木勇（小樽野鳥の会）
梅木賢俊（小樽野鳥の会）、菅野寿衛吉（会社員）、中田克道（鳥獣保護員）、羽田恭子（主婦）、平井さち子（主婦）、三宅正幸（円山小学校）、渡辺銀次郎（札幌管林局土屋文男（札幌市公衛部長）、その他 行政関係者多数の方々が参加しております。

事務局だより

北海道各地で多数の団体、個人の方々が野鳥愛護の実践活動を進めています。また、中高校生や一般の方々が、野鳥研究をしたいという相談を受けることがあります。こうした人々の広場として、また指導機関として「北海道野鳥愛護会」がデビューすることになりました。今後は探鳥会の指導者がいないということや各種集会に必要な講師なども確保してゆきたいと思えます。本会の会員の募集を行なっていますので、1人でも多くの人を参加させるように、友人、知己の方々をお誘い願います。また、本号に原稿をお寄せいただいた方々に心から厚くお礼申し上げます。今後ともよろしく願います。